

講義を聞いてのコメントに対する短いreply

- ・私は高校2年生の時にピアノを始め、20歳を超えた現在では絶対音感に近い能力を習得することができた。これは幼少期の訓練のみが絶対音感の習得を可能にするということに対する反例となるので、絶対音感の習得は幼少期以降でも可能なのではないか。

大人になってからの訓練で正確な絶対音感を獲得できたという事例を、私は信頼できる研究報告の中で見たことはありません。ただ人間の能力・行動に関することですので、例外は常にあると理解しておくべきでしょう。絶対音感は大人数になってからでは身につかないというのは原則であり(ただしかなり強力な原則)、一例でも反例があればそれが覆ってしまうというものではありません。正式の絶対音感テストであなたをテストしてみたいものです。

- ・絶対音感テストよりも相対音感テストのほうが圧倒的に難しいと感じた。
- ・自分は小さいころからピアノをしていて絶対音感には自信があり結果すべて聞き取れたのですが、相対音感のテストでは想像以上に聞き取れませんでした。
- ・絶対音感のテストは全てわかったが、相対音感のテストは全くわからなかった。

これらのコメントは、絶対音感はあるのに相対音感の能力を伸ばし損なっている(あるいはまったく知らない)人がいることを反映していると思います。しかし次のようなコメントも多くありました。この方が普通の感覚に近いのではないかと思います。

- ・固定ド音名で習っていると移動ド音名で音を捉える相対音感テストは難しそうだと感じましたが、実際にやってみると相対音感テストの方ができるように感じました。

- ・絶対音感テストの正答率が高かった一方、相対音感テストではどうしても固定ド音名で聞こえてしまう上、それを使わずにはあまり正確に答えられませんでした。

固定ドにどっぷりと浸かってしまうと、相対音高名(階名)としてドレミを使うことが難しくなる例です。

- ・3歳までの教育で絶対音感身につけることができるということでしたが…

このようなコメントが複数見られました。講義の中でまちがって言ってしまったかもしれませんので、訂正しておきます。絶対音感の獲得は、3歳までではなく、3歳から6歳くらいまでの間の訓練によって可能とされています。

- ・絶対音感と相対音感は負の相関関係にあり、片方を持っているともう片方は持っていないということを初めて知りました。絶対音感と相対音感を同時に持っている人も稀にいるのでしょうか

- ・絶対音感と相対音感の両立は不可能なのでしょうか。

絶対音感がある人は相対音感がないということではなく、相対音感が弱い場合があるというのが正しい理解です。一方で絶対音感がない多くの人は、さまざまな程度に相対音感を持っています。絶対音感を持つ音楽家のほとんどは、絶対音感と相対音感を両立させてい

ると思います。ただその場合でも、絶対音感に足を引っ張られなければもっと音楽家としての可能性を伸ばせるのではないかというのが私の考えです。

- ・ **小さい頃からピアノなど音楽をやっている人が、絶対音感を身に着けない方法があるのだろうか。**

絶対音感はそのための訓練をしなければ身につかない場合がほとんどです。相対音感を伸ばすことに力を注ぐのが正しいやり方です。

- ・ **相対音感は作曲をする上で必要ですか？**
- ・ **絶対音感は作曲をする上で必要ですか？**

作曲は相対音感がなければできません。絶対音感は頭の中のツールとして作曲に使えるかもしれませんが、それよりも別のツール (楽器やパソコン) を使う方がずっと効率的です。

- ・ **私は小学校入学と同時にピアノ教室に通い始めて音楽経験を積んできました。これは、絶対音感というよりは、八長調のときの相対音感が身についたということなのでしょうか。**

八長調で相対音感が身につけば、それはどの調でも通用する相対音感のはずです。絶対音感のひとつの音を他の音から切り離して認知する能力で、相対音感とはまったく異なる音のとらえ方です。

- ・ **絶対音感を持っている生徒が相対音感テストでも高成績を取っていました。これは絶対音感を持つ生徒が、絶対音感のスキルを相対音感テストに意図的に活用しているからなのでしょうか。**

その通りです。このやり方を絶対音感ストラテジと言います。Q & A のA6を見てください。

- ・ **今まで相対音感よりも絶対音感の方が素晴らしいという壮大な勘違いをしていたことに気づかされました。**

まったく壮大な勘違いだということに同感です。

- ・ **ソルフェージュが本来は相対音感の訓練のためのものだということにも驚きました。音大で声楽専攻の知人が「絶対音感ないからソルフェージュ苦手」と言っていたのを覚えていたからだと思いますが。**

これは日本の音楽教育の重大な誤りです。絶対音感がない人が苦手と感じるようなソルフェージュは根本的に間違っていると思います。

- ・ **絶対音感テストは鳴らされた音を聞いて何の音がを当てるものでしたが、楽譜を渡しそこに書いてある音を正しいピッチで歌えるかどうかを見る、という方法では実験できるのでしょうか。**

そのようなやり方も可能ですし、私も実際にやったこともあります。ただこれだと発声するときの筋感覚などのてがかりの影響が加わるのであまり正確な測定にはなりません。絶対音感がない人でも、最も声に出しやすい音の高さはだいたい決まっているものです。

- ・絶対音感だけでなく相対音感もやはり魅力的な能力だなと思いました。
- ・もちろん絶対音感と相対音感の両方が重要であると思いますが、どちらかと言ったら、相対音感の方が重要なのでしょうか。
- ・一奏者としては絶対音感至上主義だったので、相対音感の大切さも理解できた気がしました。
- ・日本では絶対音感を価値あるものとみなして重視する傾向があり、相対音感は認識すら薄い気がします。私自身は、その価値観を改め、相対音感も重視しようと思いました。
- ・絶対音感と相対音感、もちろん両方持っているのが一番良いと思います…
- ・絶対音感があればより良いと思いますが、せめて相対音感が身につけていたら、いわゆる「音痴」にはならないのでしょうか。
- ・相対音感も絶対音感と同じように大きな価値のあるものではないかと思いました。
- ・絶対音感が必ずしも価値のあるものではなく、音楽を理解するには相対音感も必要だと学び…
- ・音楽には相対音感が重要なのでそちらも絶対音感と同じくらい重要視されれば良いなと感じました。
- ・音楽において相対音感是非常に大切だとおっしゃっていましたが、一流の音楽家になるとしたときに一体どちらの能力を優先して取得した方が良いでしょうか。

音楽では絶対音感よりも相対音感が重要だということは多くの学生のみなさんが理解してくれたようですが、講義では中立的な言い方をしたので、上のようなコメントがたくさんありました。絶対音感の他に相対音感も重要なのではなく、音楽では絶対音感はなくともよい、むしろない方がよく、相対音感こそが不可欠だというのが私の考えです。絶対音感がないならばせめて相対音感を…と考える人は絶対音感信仰から抜け切れていないと言えるでしょう。相対音感、絶対音感を獲得できなかった人に残された次善の道なのではなく、音楽の王道なのです。

- ・もし自分の子どもを絶対音感にしたいと思ったら小学生になってからでは遅すぎますか少し遅いかもしれませんが、不可能ではありません。しかしそれ以前にそのようなことは考えない方がよいと思います。

- ・声楽の人たちは相対音感を何よりも大切にしようですが、ない人が多かったです。では、なにを頼りに音が外れていると認識し、修正するのでしょうか。
- ・相対音感を身につけている人が0%だった声楽科があることに私も驚きましたが、相対音感がなくても声楽をやることはできるのでしょうか。

この結果には私も驚きました。相対音感がなくて歌が歌えるはずがないですし、声楽専攻の人たちですから、自覚できないレベルの相対音感を持っているというのが本当のところだと思います。しかしカラオケで歌う程度ならこれでもかまわないのですが、音楽・音楽

教育の学生が自分の相対音感を自覚できず、相対音高についての知識を持たないでいいはずはありません。将来、音楽を教える立場に立つ人たちなのですから。これも日本の音楽教育の歪みを反映している現象と言えます

・ **ハ長調、ト長調はなぜド長調、ソ長調ではだめなのか。**

ハやトは音名で、ドやソは階名だからです。現在の日本では固定ド音名が広まっていますので、このような質問がでるのももっともなことです。ハ (C) をドと呼ぶことが音楽の世界で広まっているのですから、ハ長調ではなくド長調と呼ぶように変わってしまうこともあり得るのですが、かるうじて調の呼び方にだけ音名のハニホが残っています。なおイタリアやフランスではdo, solを音名として用いていますので、調もDo maggiore (majeur), Sol maggiore (majeur) などと呼びます。

- ・ 自分の中では絶対音感神話をどこかで信じており、絶対音感は優れたものであり、音楽に関する早期教育を受けられなかった自分はポテンシャル的に劣っているのだという思い込みと諦観を持っていました。しかし、相対音感の方が寧ろ音楽を知覚し分析する上で必要な、価値ある能力であること、絶対音感と相対音感には負の相関が見られることを知り、驚きました。
- ・ 絶対音感と相対音感の各国間に違いがあるのは、その国で施される音楽教育に原因があるという視点は、日本の音楽教育について考えさせられる視点だと思いました。音楽の授業では楽しく演奏をすることばかり目を向けられていて、肝心の音階や調の知識には触れません。いくら芸術科目とはいえ、音楽の学問的な部分にほとんど触れない日本の義務教育には見直すべき点があると私は思いました。

まったくその通りです。講義をした甲斐がありました。多くの人がこのように理解してほしいと願っています。

- ・ 日本の音大生は絶対音感の能力が優れている傾向があることを知りました。絶対音感を持っている人は受験で行う聴音などの試験でとても有利であるので、その能力を持っていない人は圧倒的に不利であり、音楽を専門とする職業などをあきらめてしまうケースもあると思います。
- ・ そもそもなぜ絶対音感を持った生徒ばかりが音大に入学するのだろうか。入試にも絶対音感の方が圧倒的優位になるような試験方法が取られていたりするのだろうか

前のコメントにあった「壮大な勘違いが」日本の高等音楽教育の世界にも根深く存在するという憂慮すべき事態だと思います。

- ・ **絶対音感についてネットで少し調べてみたところ幼いころから訓練して絶対音感を習得すると脳が活性化し賢くなるという記事がありました。**

絶対音感を習得すると脳が活性化するという説を確かな科学的根拠もなく主張して教材を売り込もうとする動きがあるのは困ったことです。絶対音感を身につけると絶対音高を処理するように脳が変化することは確かですが、その代わりに音楽を処理する部分が働かなくなる可能性があります。何かをすると脳が活性化するというこの手の記事は、確かな根

抛なしに何かを広めようとする意図が明白ですので警戒する必要があります。科学的思考をする人ならばこのようなものを信じないと思うのですが、信じ込む人が多いということは科学教育が機能していないことの現れだと思います。

- ・ 絶対音感を持っていれば、相対音感のテストで2つの音を聞いたときに2つの音名が分かるのだから1つ目の基準音からの差で判断することはできないのですか。
 - ・ 私はもともと相対音感とはその音を聴いて頭の中で音程を上下させ、自分が既に知っている音になったときにその音までどのくらい半音ずらしたかを踏まえ、聞いた音を当てるものだと思っていました（例を挙げると、Desを聴いたのち2個半音上げるとEsになるのでEsから2個半音を下げ、聴いた音をDesと答える手法です。私はEsに関しては絶対音感があります）。今日の講義を聞いてこれは相対音感というより、既知の音と照らし合わせる観点から絶対音感の要素も入っていると思うのですがいかがでしょうか。
- これらは相対音感を調べるテストで絶対音感を使って答えるやり方（絶対音感ストラテジ）で、このやり方がとられると本来のテストの目的が達成できなくなってしまいます（A6参照）。